

## 令和2年度 研究推進の取組 まとめ

### 1. 取り組みの方向性と、目標

- 授業研究を中心とした研究推進。教科・領域を限定せず、研究主題に沿って深めていく。
- 研究授業は、低・中・高ブロック各1本とする。
  - \* ブロックメンバーで事前指導案検討を行い、参観のポイントをもとに授業参観・研究協議会
  - \* できる限り、講師招聘して指導講話。
- 研究協議の柱を設定する。また、柱は年間を通して共通した内容とする。
- 授業後は「研究推進だより」を発行し、「共有」と「だれでも」をキーワードに全員で取り組む。
- やりっぱなしで終わらせず、各学年等で、日々の実践に生かす。

### 2. 成果

- 年度初めに研究推進の方向性について全職員で研修した。
- 回数を減らした代わりに、事前指導案検討会を行うなど、チームでの研究にすることができた。
- 研究テーマに沿った提案性のある授業が実施された。
- 少人数での協議会だったので全員発言が可能だった。特に経験の浅い教員にとって有意義だった。
- 授業参観時の視点の明確化、協議の柱の明確化により、事後の実践につながる話げができた。
- 研究推進だよりの発行により、「共有」し「だれでも」取り組める短期目標の設定ができた。
- 「思考を広げ深めるかかわりのしかけ」について、対象・目的・ツールを効果的に組み合わせる意図的に授業の中に仕組もうとする教職員の意識が高まった。
- 授業の構造化・必然性というキーワードが浸透し、授業づくりにいかされてきた。

<授業づくりにいかすポイント>

★単元設計「知→協→実」＝「インプット→インテイク→アウトプット」

★学年（発達段階）に応じたペアワーク

★思考を広げるグループワーク（GW）→思考を深めるひとり学び

しかけ：ジグソー法など焦点化した話し合い、カード・ボードの活用  
思考ツールの活用（ワークシート・板書）、ICT活用等



### 3. 課題

- 研究推進委員会からの発信は行ったが、日々の授業に生かしているかの検証は不十分。
- より具体的で効果的なICT・タブレット活用法。
- コロナ禍において積極的な対面での「かかわり」が制限される中で効果的で多様な「かかわり」の活動が増やしにくい。（＝だからこそ、今だからできる工夫が財産になる！）
- 「ひとり学び（振り返り）」場面での思考の深まりをより確かなものにするために、GWの段階の「かかわりのしかけ」の工夫（＝ツールや活動方法の選択・目的の明確化）について継続した取り組みが必要。
- 思考を深め、学びをつなぐとはどういうことか、子どもの姿でイメージし共有することが必要。
- 研究協議の場の持ち方の工夫改善。